

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号

※ 甲 第

号

氏

名

胡 蘇紅

論 文 題 目

逆接を表す接続表現の中日対照研究
— 「但是 (danshi)」と「けど」を中心に—

論文審査担当者

主 査	名古屋大学教授	堀江 薫
委 員	名古屋大学教授	佐久間 淳一
委 員	名古屋大学准教授	加藤 高志
委 員	名古屋大学准教授	宇都木 昭

論文審査の結果の要旨

【本論文の意義】

本博士論文は、コーパス言語学、認知言語学、相互行為言語学（会話分析）など多角的な観点から、中国語の逆接を表す接続表現である「但是（danshi）」と日本語の逆接を表す接続表現である「けど」を対象に、それぞれの言語における、「但是」と「けど」の位置づけを、話し言葉（自然会話）や書き言葉のコーパスを駆使し、競合する他の接続表現との比較や共起表現の分析を通じて、両者の機能上の対照を行った。

本論文の意義は、逆接表現というテキスト・談話構成上重要な役割を果たす中国語と日本語の代表的な形式「但是」と「けど」を対象とし、中国語に関しては自ら構築した自然会話コーパスも用いて、話し言葉と書き言葉における両形式の機能を、競合する他表現との比較や共起する形式との共起関係を手がかりに、まず中国語、日本語それぞれの言語内における「但是」と「けど」の位置づけを明確にした点にある。さらに、その上で両者の機能的な対照を行い、これまでの逆接表現の両言語の対照研究上の知見に新たな洞察を加えることができた点も高く評価できる。

【本論文の概要】

本論文は7章より構成される。

第1章では、中国語の「但是」と日本語の「けど」の中日対照研究を概観し、「但是」と「けど」の対照を自然会話データに基づき行う必要性および研究課題を提示した。

第2章では、「但是」と「けど」に関する先行研究を概観したうえで、先行研究の問題点を指摘し、本論文の目的を提示した。

第3章では、分析資料である『CCLコーパス』と申請者自ら構築した『大連財経学院（以下大財）コーパス』について説明し、書き言葉と中国人大学生による自然会話における「但是」と「但（dan）」の相違点を、出現数、出現位置、共起表現および機能という4つの面から考察した。具体的には、まず、「但是」は書き言葉に比べ、自然会話において頻繁に用いられることを示した。次に、「但是」は書き言葉において、文と文をつなぐ際に頻繁に用いられること、自然会話において、ターン中で頻繁に用いられることを示した。また、書き言葉と自然会話のどちらにおいても、「但是」と「虽然（suiran）」の共起率が最も高いが、書き言葉では、「但是」と従属節に生起する連詞（接続助詞・接続詞）との共起率が「但」に比べ低いことを示した。さらに、書き言葉において、「但是」の後ろで一時中止する文の割合が高いのに対して、自然会話においては、「但是」の後ろで一時中止する会話の割合が低いことを示した。最後に、自然会話において、連詞（接続助詞・接続詞）として用いられる際は、「但是」に比べ「但」の使用頻度が高いのに対して、談話標識として用いられる際は、「但」に比べ「但是」の使用頻度が高いことを示した。

論文審査の結果の要旨

第4章では、頻繁に「但是」とペアで用いられる「虽然」の使用に関して、『人民日報』（2000年全年分）と『大財コーパス』のデータに基づいて考察を行った。まず、「虽然」と「虽说（suishuo）」などの類似表現との比較を通して、新聞においても、自然会話においても、「虽然」が最も多く用いられることを示した。興味深い点は、先行研究で話し言葉でのみ用いられるとされている「虽说」と「虽说是（suishuoshi）」が書き言葉でも用いられていることである。さらに、『人民日報』では、「虽然」は「但」と最も頻繁に共起して用いられるのに対して、『大財コーパス』では、「但是」と最も頻繁に共起して用いられることを示した。最後に、『人民日報』では、「虽然」と副詞が頻繁に共起して用いられるのに対して、『大財コーパス』では、「虽然」と「連詞＋副詞」が頻繁に共起して用いられることを示した。

第5章では、日本語の「けど」に関する考察を行った。まず、文末における「けど」と「が」の相違点を認知的・機能的観点から考察した。「が」と「けど」の出現位置は、ターン中が多いものの、両者ともターン末に全体の4分の1前後の数が生起していることから、日常会話において「が」と「けど」の終助詞用法が定着していることが確認できた。文末における「が」は「前置き」機能を文中と同様に表す傾向が強いものに対して、「けど」は話し手の主観的態度を表す傾向が強いことが明らかになった。次に、依頼と断りの相互行為における「けど」の言いさし表現（終助詞用法）を連鎖組織の観点から考察した。その結果、「けど」の言いさし表現は本題行為と挿入拡張で頻繁に用いられることが分かった。さらに、「けど」は「前置き連鎖」、「挿入連鎖」、「後方連鎖」の発話行為連鎖ごとに機能が分化していることが明らかになった。最後に接続詞である「けど」と「だけど」の相違点に関して、機能拡張の観点から考察した。

第6章では、品詞別の角度から、中国語の「但是」と日本語の「けど」の対応関係を考察し、「倒置文における「けど」に対応するのは「但是」ではなく、「虽然」である」という新しい提案を行った。さらに、「但是」は「けど」に比べ、自然会話で談話標識としての使用頻度が高い」という先行研究で言及されていない特徴を指摘した。

最後に第7章では、本論文の総括と示唆を述べた。

【審査委員会による審議および合否判定】

口述試験では、申請者の方から博士論文の概要についての説明が行われた後、審査委員から質疑応答が行われた。本博士論文が、申請者自らが構築した長時間に及ぶ中国語の自然会話コーパスを筆頭に、中日語の大量の話し言葉・書き言葉コーパスに基づいて、中国語と日本語の代表的な逆接表現を取り上げ、それぞれの言語内の両表現の機能的な特徴を解明し、その上で両表現の対照言語学的な分析を試みた点は高く評価された。一方、改善点として、量的なデータの解釈、理

論文審査の結果の要旨

論的分析が一方の言語のみを対象に適用されている点、申請者自身の構築による自然会話データの背景情報が不足している点などを指摘頂いた。

本論文は、全体として本論文は質量ともに博士後期課程の学位論文としての基準を十分に満たしていると審査委員会の全員一致で判断した。したがって、本論文を合格と判断した。